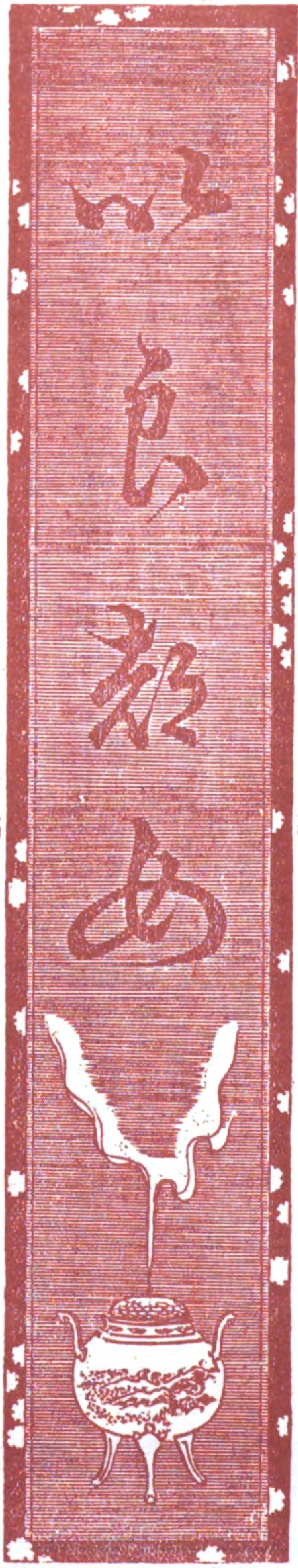
（遞信省認可）

いらつめ



掲載要目

懸賞文藝　源氏を讀む

戸隱山紀行は當号で完結しました。

第七十号

一部定價金貳錢五厘

明治廿三年九月二十日發兌

韻文四種

◎貧……美妙齋
◎沖……同上
◎女郎花……同上
◎案山子……朧月子

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

大に次号に於て伸びる計畫の有るため特更に本号て此やつやつしい小册にいたしました。　次号からは毎号二部發兌の制を廢し毎号一部發兌とし、そして此秋期の初まりと同時に聊さか記事等に至つても一新を與へるつもりです。　量は少なくとも實の有る物を作ることに決め、またその價ひ一時に五錢を抛つて二部買ふ代りに一時に二錢五厘出して一部買ふ事の出來るやうにしました。

吾々の企望むなしく無く、いよ／＼文學美術の粹を拔くことゝの事實が來月五日發兌の次号に於てあらはれるかどうかは其号を見る讀者諸孃の御意見に任せます。　通信問答雜錄ならびに有益な寄書など隨分幅輳して居ます。　次号に於ては本号の御理合を充分にそる考です。　一言御披露かた／＼口上まで。

成美社

遞信省認可

いらつめ第七十號目次（明治廿三年九月二十日）

●文藝美術……源氏を讀む（黒江直二＝可楓＝壽子＝玄や子＝久光＝曉子＝ひろ子＝花子＝露城＝秀子＝なしの＝さち子＝香圃女史＝可楓）

○韻　文……沖……………………美妙齋主人

貧……………………同　　上

女郎花……………………同　　上

紫山子……………………朧　月　子

○記　文……戸隱山紀行（三）……………美　　妙

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵稅共金三錢、十二部金二拾九錢郵稅共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵稅共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵稅共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵稅共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵稅共金四錢、二十部金六拾五錢郵稅共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵稅共金壹圓九拾錢〇並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事〇府內に限り無郵稅〇每月二回（五日及二十日）發兌〇金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局とある處に神田郵便局と記し受取人欄內に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割增しなれば妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

前金切の号には其印を帶封に附け後金領收せぬ內は發送を差扣へる事

從第六十八號至第七十七號十部版權所有

明治廿三年九月十八日印刷　明治廿三年九月二十日出版

發行人　山田武太郎　東京市神田區平永町九番地居住

印刷人　山本鑑之進　東京市本鄉區駒込西片町十番地居住

發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

去る十三日の國民の友には美妙齋主人の韻文論の一斑が出て居ます

いらつめ本號には各種韻文數曲が載つて居ます

文藝美術

第二十六回懸賞文藝應募得點

題　源氏を讀む

○俳句

むらさきれ色や見あかぬ藤の花……黒江直二(カヒツ)　楓(カスヘ)

石山の月や源氏のよミはじめ……可　楓(カスヘ)

横笛の遠音ゆかしや靑あらし……仝　上

以上三句無賞

式部郞の儁して僕も花のえん……可　楓(カスヘ)

眼に倦まぬ錦や文字の玉かつら……仁科壽子(ケトウ イ)

鈴虫の聲やこゝろに玉れ聲……仝　上

涼しさや言葉もかをる椎か本……仝　上

以上四句第四等賞

○和歌

むらさきの色こそ見えね言の葉を
つたへし筆の跡ぞゆかしき……本吉みは(カヒツ)

右無賞

紫の色をゆかしみ分け見れバ
ふかきよはひれいとゞあやしき……有本久光(キイヘ)

咲出し昔も今も世の人の
愛るゆかりの色ぞあせざる……伊東曉子(イヨ)

染置し君ぞゆかしき年へても
あせざるいろを見るふつ夕ても……仝　上

筆れあと見る度毎よむらさきされ
雲井の君のあつかしきかあ……本吉みは(カヒツ)

以上四首第四等賞

うつしてし若紫れいろ深き
うつらふ世にもかはらざりけり……有本久光(キイヘ)

散てより千代と經れどもむらさきの
花のいろ香はあはにおひつゝ……横山弘子(カヒツ)

たぐふべき物こそなけれ言の葉の
花むらさきの深きにほひは……仝　上

千とせ經し昔の色の紫に
あほ世の人の心そめつゝ……伊東曉子(イヨ)

月かげを筆にうつして後の世を
てらす鏡となしにけるかあ……菊野はな子(ライス フキ)

くれ竹の世をへて光つきせぬは
月の桂の影やれこれる……仝　上

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

紫のゆかりの色やこもるらん
むかしながらに今も香れる……………………全　上
以上七首第三等賞

あげくとも今はかひなしきりぐす
書きし眞心人し知らねバ……………………露　城(イセ)
右審査以外

○唱歌

（イ）　水野ひで(オホサカ)

いく千万のひとぐの　學びの道のしをりなる
ふたつなき夜れ涼しさよ　ひとりひもとく源氏草。
右無賞

（ロ）　菊野はな子(イバラキ)

五十あまり四まきにこめし筆のあと
そのむかしとヽへバさヽなみや　志賀の都のかたほとり
月の名所と名も高き　石山寺の月かげよ
ゆかりの色のこくもあれ、　うすきも共にこきませて、
うつせし文のなやあれば　かつらのまなのかんバしく
月のひかりのかぎりなく　盡ぬ其名やのこしけるかも。
右第三等賞

○文章

（イ）　蘆野潤三郎(イヘシロ)

明治文學の性命とも云ふべき小說江戸紫の文壇十傑の投票と募ッたとれ小說家ばかり當撰したのでも一斑はしれます其小說家の組み立てる小說の原料たる人物と事柄とれせんなもれ。多くハ嘘らしたれ人物と誠しからぬ事柄ばかり——少しハ善いのもあるが——抑是が小說の本領でしやうか。
徒然あるまゝ、紫史を讀んで驚きました、紫氏の文藻の富麗と筆力の雄健。しかも善く當時の風俗と寫したのよ。　風景を記せバ春花秋葉眼前に動き、人物を記せバ君子小人尋常の人老人小兒輕薄子田舍人の情態一として眞よ迫らざるなし。離別を叙それバ人の腸を斷ち、滑稽を雜ふれバ人ハ頤を解く。千變万化の際還よ一の奇怪を語らず、會て嘘らしき人物なし。と或人が云ッふも過賞てハありません。
今日の小說家よ希望する所ハ高尚ある理想と優美ある文章とを以て—兎に角—社會の眞面實相と寫してもらひたいものです。
右無賞

（二）　橘　さち子（トウケイ）

雨夜のものがたりのとりに女の品定めの博士なりしは左馬頭なり。先女のきはをいはんとて其頃左馬頭のかたらひし女の余りに物ねたみするがうるさしとて離別せんとせしをりに女うらみて手の指を喰付たると憤りて別れける時に、手を折りてあひみしことを数ふれば

　このひとつやは君がうきふし

心と指を折て今まで逢見し間のうれふしと数ふれば此度ばかりか此度ばかりにあらずとなり。指を喰ひ付かれたるよせにて手を折てとはいへるなり。

　うきふしと心ひとつに数へきて
　　こや君が手をわかるべきをり

この歌よみし女は左馬頭が指を喰付たる女にて、即ち上の返しなり。心は是まで君がさま〴〵のうれふしを我心一つに数へつゝ過し来て終に此度や別かるべき折ならんとなり。此はゝき木の巻の雨夜の物語。左馬頭がものねたみせし女を疎みて離別せんと思ひ立けるはよく〳〵の事あらんと思ひまはして、つゝしむべきも物ねたみの事なり。これと思へば男女ともに物ねたみも家の破るゝもとなればつゝしみても猶つゝしむべき事なり。此さうしにも美妙先生の物せられし炭ぐろの中に夫婦のさかひも即ち嫉妬よりおこりて、末々大いなるさわぎとなりしあり。よく〳〵此所を味いて、幾度もくりかへして見れば又夫婦の味ひ出来りて、よくかみしめて見れば今世にいふ、ホームホームスウヰートホーム！

（八）　水野　秀（オホサカ）

今やはや夏の暑もおとろえて、燈火たのしむ秋のそら、風に散りゆく桐の葉も雨に砕けし芭蕉さへおなしあはれにふし沈み、池のはちすもひたすらに名残りを惜む風情あり。涼しき窓をおしひらき、浄き机によりかゝり、いらつめの源氏と読むてふ題ははや〆切りも近からん。いま一たび読んでものせんと取りいだす源氏、亡き母の二つなき宝と愛でたまひしこの源氏。ひもとけばいくたびとなくくりかへしたまひし手垢もあり〳〵と見えにけり。まだふり分け髪のをさなき頃あさの課業をへしとき、いと親切に学の道の鏡となるものはいと多けれど源氏物語にうへこすものはなし。よく〳〵読んで味へよかし。母はいくたびとなく見しおもとあれば疑はしきところも教へもせんと慈愛ふかきおん声をかけたまひしも、定まる命せんすべもなくそれを名残りと亡せたまいし

ハわが身の不幸！ わが家の不幸！ もし母の存生ならバ、幼なき時の日課の今に永く續きしならバわが身の幸とわが家の幸ハ人の羨む程にありなんものを。 ための嘆きもぐちの涙もふきしむかしの餘波り。 折りもをり四天王寺の鐘ハ鏗く〳〵と無常をつげ渡りぬ。 くもりなき月ハ物おもはしげに机のほとりをてらし、草の葉にすだく虫のねハいとゞあはれに流るゝ涙を吊へり。

以上二章第四等賞

橘 さち子（ナトロ ケイ）

（二）

「この暑いにお前本ばかり見てお出だ。 ちとお涼みな」

「おや御祖母様いつの間に入らしつたの。 今日ハお暑さがきびしいから又お目がれたミハしませぬか」。

「いえ今日ハ余ほどよいから。 藥も今さしてもらふたけど年が年だからなあたり前だと思ふてゐるよ。 何の面白い物なら讀んでお聞かせ。」

「はい源氏物がたりの總論黑澤翁麿の述られし中で私が一番此所を感心しましたから今見てゐました」。

「其後と讀んでお聞かせよ。 大きな聲でなくてハ聞えないから」。

「はい、ある丈大きな聲で讀みましやう。 世に紫式部ハ余り妙文を書出たる罪によりて、地獄に落たりといふ浮説あるハ法師のともがらのざくれにて尤も論ずるにたらぬ事なれども、つら〳〵おもふに此物語を書ける中に罪とすべき事なきにあらず。 古抄共にとかく物語ハ本意をまげて強て儒に引付け、佛に引付けなど蛇足の辨をそへたるが多くてかゝる一大事をしも論じたる物なきハ委しからぬ事なり。 今明かに辨ふるを見るべし。 そも〳〵朱雀院冷泉院など歴代の天皇の尊號を其まゝに書出せる事いと〳〵有まじき大罪ならずや。本より唯其尊號と借るのみハ事ながら殊に冷泉院ハ母后源氏と密通のたねなるよしに書けるなどハ懸てもなるまじき事なるを思ふべし。 發端の語に何れの御時にや有りけん云々と書出たる始終此心もてかくべき事なるとや。 是によりて思ふに上に云へる堕獄の浮説ハ古くかやうの批判などもありしを其片端を聞傳へて法師の輩のおのが道に引つけてさる筋といひ出せるもやならん。 其引付ごとこそいと惡けれど罪有りとしも云へるハいみじく聞所ありて覺ゆ。 恐ければ我皇國ハ神代より今の人皇に至るまでかたじけなくも皇統絶させたまはず、天地と共に天津日嗣知しめせばたとへ太

古の　天皇といへども　今上皇帝とひとしく敬ひ恐み奉らすしては叶はざる理なるを、中頃より此心を忘れて道々しき書どもなどにも罪を犯せる物少なからず、増して今の世の物などはおのがまゝ心々に昔の　天皇の大御上をよくも悪くも書きちらし聊かも憚る事なきは唐土の振に移れるものにていといと非の限なるを思ふべし。　彼國は國王暫くも續く事なくたとへば皇國の武將などの如く移替れば唐の代と成て漢の他人なれば憚かるに及はず、又明の世と成ては唐の世は…」

「もうよいよわかつたから。　誠によく論じてゐるね。種彦はお祖父様の所へ源氏と聞に來て、それからあのゐなか源氏を作ッたので、其時に出來た草双紙は紙もよし、殊に繪は國貞が骨折て、見事であッたのさ」。

「あらお祖母様は私に本とよまして置きながら昔の事を考へて入らッしやるのね。　いやな。」

「なにお前はやな事はありやせぬ。　今も其論にもある通りで田舎源氏と作る時にも種彦にお祖父様があるたけ人の道德を損しないやうに作れと仰せられて、大分こまッたやうであッた種彦がの。」

「はアさうで御座いましたか。　それでのも存じませんか

藤の方と源氏が度々しのび逢ッて、とし元は杉なえが心配してするよまつうでないと巳かッた事がありました。」

「それだから杉さえが今からはお二人様一所に御しんなッてもよいといッた事で、又お祖父様が其時に仰せられたは、李下の冠瓜田の沓。此事はいつまでたッてもちがはないからお前も其つもりでね、此世の中を渡る時とむつかしい物はないからね。」

「それだから世の中といやよありますよ。」

「又そんなことを云ひ出して。」

「あよねわたしは思ふてゐるのは我身一つの事でなく、世の中の多かれた所をかよ先て行きたいと思ひます。」

「そりや誠に何よりの事ぢや。　またしも夕べ源氏とよんでかんがへた歌を

なつかしくいろもかそらぬ紫の
　世に名もかをる水くきのあと

右第三等賞

香[illegible]女史（イネ）

（未）

暮れ行く秋の空には梧桐はいか先しさも尽んは名許り。後は塵となッて枝許りが戀しさうに震へてゐます。此淋し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

い秋の景色を庭にした離坐敷。閉ぢこえた障子で室の様子は解りませんが優しい聲で本を讀んでゐるのが聞えました。

「女ばかり身ともてなすさまも所せうあはれなるべきものはなし。物のあはれをも、をかしき事をも見知らぬさまにひき入り、しづみなどそれば何につけてか世のふるさえ〳〵しさも常なき世のつれ〳〵とも慰さむべきぞはおほかた物の心を知らずいふがひなきものにならひたらんもおほしたてけん、親もいと口惜しかるべきものにはあらずや。心にのみこめて無言太子とか法師ばらのかなしきことにする昔のたとひのやうに惡き事よき事を思ひ知りながらうづもれなんもいふがひなし。わが心ながらもよきほどにはいかでたもつべきぞとおぼしめぐらすも今はたゞ女一の宮の御ためなり。」

「櫻木さん本當に此通りで御座いますねエ。」

僅かに初音が漏れました。

「さうですよ。上つ方の姫君でさへ其通りですから妾共は猶更……」

「女子の心使ひは上も下も昔も今も違ひませんよね。私共は御互ひに學校をも卒業しましたから猶の事身を謹しまなくッちやなりませんが本當に女と云ふ者は余程責任の重い者

でございますねエ」。

「妾しあせ男に生れなかッたかと存じますよ。ほんとに女子程身の大切な者は殊に教育をうけた……者はなまじひに理と知ッて居ますからね。貴君……でもなんぼ教育が無いッても妹と脊鏡の様な事はできませぬ」。

「随分ないとも申されませんよ。現に貴嬢が御覽遊ばせ。ふのまき（召使の名）と……馬鹿なたッた少し許りの御金の事に……」

「さう〳〵さうでございましたッけね……まアなにしろ私共は苟にも教育を受けた者ですから出來る丈け身を謹んで、天晴れ賢女と云はれる樣によ」。

「おや〳〵大層御話しが理に落ちて參りました事。とんだ御說から」。

はゝ、これがとんだ平八夕霧の卷とでも申すのでしやう」。

「はゝ、馬鹿なこと仰ッてよ……駄洒落なんぞは淑女の最も忌むべき者ですわ。」

「本當にさうですね。ではそんな事は止めにして……もッと精出して讀みましやう。」

折から空を走せて鳴いて往ッた時鳥、あはれ折角の一聲も

此鶯の音色ようちまけて、身はゝや何所へう。」

右第二等賞

○端唄（二上り）　（イ）　可　楓（ヘスヘヤ）

みなもとや、かたい石山高とのいそふも長閑に花の宴、薄雲さへも打それて、うたふ梅の枝おもしろや。まだ其上にとてあつに通ふ松風沁地よや。かゝり火さへも消つもえそぎし昔を指折りかぞへ、それバまぼろし、夢のうきはし。

右審査以外

沖（韻文）　美妙齋

なよ風の　撫でゝ　ねむれる　沖の　面。
龍女の　ぬの　か、　ひとはりの
青ぞめ絹の　あみしぼり、
白帆の　ちらし　うそれ　もく。
あまだくまたる　さとと光の
ゐくほの　うづも　ほのうあり。
・　・　・　・
その　絹の　したに　ゐるしは　こもりくの
はてハ　ゐくほも　人と　呑む。
きらえく　色も　かりにして、

一吹き　吹けバ　あまぐさき
風よ　魔臣の　ちらはれて、
萬象　くろし、　涙さむし。

貧（韻文）　美妙齋

貧それバ　緞子に　いねし　はぶたへの
はだも　つゝれに　つゝまれて
紅梅ぎぬの　類と　見し
きのふれ　いろも　あまよみれ
甲斐絹の　ねきみ　鳴きも　せず。
身の　やせ　見ゆる　むかし帯
あまだ　あり　けり　細腰よ
はてハ　骨さへ　龍田川、
秋と　うきよと　もふぞえに
てりそふ　もえち　氣を　もえち、
食も　こゝろも　やそりもく。
ましてや　貧に　うまれ來て
餘所　知らぬ　身の　いうにぞや。
はづかしあづふ　身も　ひとり、
しづの　伏屋よ　うまれでし

これ 人間の 屑ひろひ、
はかなく におふ竹のこの
洩る 目の おやは ふしなくせ。
いでや ねのふし 笥の
指に裂かれて きぬ〴〵の
歌と とゞめし 片もなり、
けふは 紅白 いろかえり、
無常は くろの 水引の
やせ帯 かけし 紙も あり。
世は いろ〳〵の かぶにしき、
喜憂の はてを ごそためれ
末の ところよ さぐり出す
われも 一人の 聖者 かな。
白蓮の 花 泥よ おふ、
泥れ うちにも 清淨の
こあもと あると 思ひ知れ。
百合の 紅 塵に 咲く、
塵の なくにも 猩々緋
色と こもると 思へかし。

われも 天地は 大洪爐
それよも 似たる 竹籠に
におふて かへる 人は 紙
三行半は 端も あり、
結納 こめしも あるべきよ、
いづれも 兄かで 五十年
それを 命に 漉き延ばす
いづくよ 分を 欠くべきぞ。
欠かじといへど 欠きしにも
おとる すがたを 見るからに
たのまれぬ ものと うき世 ゝな。
夫婦 ふたりよ 子は 三人、
むゝしは いまは 胡麻塩も
びんづら くろく、 色も こく
かまど えづきて われなべに
ふたり 一体 ふさくしき
妻も ありそれ 海よりも
深き 慈愛の 子も うまれ、
子とし おもへば 身の はしと

そら　不思議にも　目のくれて、
　わが　身の　つとめ　まもりふだ、
守らぬ　神の　なる　ものか。
思へ　うき世は　貧こそ　敵。
　森羅萬象　ことごとく
慈悲の　かは　着て　血と　舐る。
　上界　下界　雲　ひとへ、
　一重て　千里、　萬人こそ
くるしむ　聲て　つたはらぬ。
　目は　うろけれど　ひと　重ね
こがねよ　代へし　羽衣も
　人に　ねとせて　舞ふ　そらの
天女は　ひとり　月と　見る。
まことならば　平等と
　言はれし　かひよ　月だにも
思ひやる　目も　あるべきを
　知らず　顔にて　よしきにて
　てりて　つゝれよ　兇光かぬ。
　邪正の　道に　繩　うちて

正せむ　ゆがむ　かそきしの
　ミヽづも　夜は　ほたる火と
色を　よそほふ　世の　中に
　かざれる　人こそ　多き　かな。
　何と　いはれに　紙と　石、
片おとし　ある　世の　中か。
　富みたる　方は　うらやまず。
あど　まづしき　か　さとり得ず。
　ふまれて　さわぐ　溷板に
聞耳、　たてゝ　ゑむ　つまの
　問はぬも　くるし　うすまうけ。
世は　せちがらく　ある子繩、
　むすぶ　紙撚の　一筋も
おろかに　すてぬ　うき世より
　つながれてせし　玉の　緒こそ
糸の　はし　引く　はつあさよ。
　われ　もろともに　五人口
五人に　ひかつ　代　とへむ……
　あさだし　こそは　やせ肱を

張りつ 張られつ いでむかふ。
むかへられて 土産も あらバ…無き 物を
みやげ と せがむ なさけなさよ！
みかへれバ 妻も うしろを 見せて 泣く！

○ ○ ○ ○

佛者の 因果 おもひしる。
米と 汁にて 痩髑髏
そだて來にしも またゝく 間。
いま 一炊の なはれげよ
ためいき つけバ 無心なる
のきばの しのぶ 色 さえて
ぞゞしき 風よ うごく めり。

庭前の女郎花風よもまれて前後狼籍

美 妙 齋

吹く 風を 花と 怨まじ をみなへし、
あめに 濡れしを あえだぞ と
おのが 心に おしはかる
うき世の 人ぞ はアかなき。
夏と めぐる と 死でし 雨
今は また 褪めし いろ ならふ。
それも この 世の つとめ あり。
もえては 枯る、はる と 秋
對の あらねと 世に 無きを
何に まよひて おもかげを
かはらで あれ と いのり けむ。
果をし 言へバ 小町にて、
それも なあめの ひとつ あり。
かれて この 根と やしなへバ
はるは ふたゝび 花も 見む。
花 さく ために 枯れ行かバ、
のこる うらみは あまたけの
ひと秋 たのむ そでがきも
やがて 朽ちては たふれふす。
世界 平等 かみ と しも、
道の たがひと ならがねの
土にも まもる 美の もとを
ひろひて 吸ひて いさや 來ん
としの かざりの 玉 と せむ。
としの かざりの 玉 と せむ。

案山子

朧月子

破れし笠と蓑かつぎ、
弓、矢たづさへ野に出しは
早稲の花散り隣人
鳴子を作る時ありき。
雨もふるとも風吹くも
恐れたゆまず弓はれば
鴉、雀はとびのすがた
見るや遠くににぐるあり。
日は西山の床に入り
ふぎりと暗は世をおほひ、
鳥は塒に休むとも
われは眠らず夜もすがら。
草、木も眠る丑みつに
尾花は招き女郎花
あだに見ゆれどさそはれず

夜の女王はめぐみうく。
かくて時過ぎ、日は去りて、
黄金の波の田にうてば
我身もいよゝ細り行き、
二月前の影はなし。
あるじは田を見よろこびて
さかもりひらき楽しめど
われは草間にすてられて
滴の酒もなくばかり。
鎌は稲田を嘗め終り、
秋風さむく虫すだき
霜の草葉におく夜半に
うづらの宿となるは誰。

戸隱山紀行（三）

美妙齋主人

両神社の左りの手前、さし出た岩角に設けた一構への家ハ即ち奥社を護る男のゐる處で、すべて岩を土臺としました岩を楯よして、一方社に向つた方ハ壁が岩、岩の窪みが即ち竈、入口ハ天日も洩れず殆んと暗夜、音なひの聲よ立ち出て來たのハくゞり袴をどッぷり穿いて惣髪に結つた男でした。やがて客座とも言ふところに案内されて今一人の主の山守が應接しました。

客座ハ八疊ばかりの座敷、岩角へさしぬけた一間で欄杆が古風についてゐました。　岩角ハ事もゑ眺めもいゝ事、其處休んで遠近を望めば何がなし、ゝい千里兩眼の中。

裏口から絶頂と仰げば、さてもよく峙つた事、只岩石ハ塊りでした。　岩ハ妙義あたりの粘土の凝ッたやうな物とは違つて全くハ石、それで一面用捨なく屹立してゐました。　苔が滴ちて足ハそべる。わづかよなる岩間のとゞが足ハ掛け處、手の入れ場所、道ハ無い處に道を認めるばかりの至り。絶頂ハ充分に見盡くすにハ一日かゝるといふ廣さ、而も我も我もと峙つ岩石の種々さま〳〵。　蟻のとわたりといふ道ハ幅僅かに只ハ五寸。五寸の處が即ち峯ハ上、左右ハ底も知れぬ千尋の谷、一歩足をあやまてば身体ハ微塵です。わづかよ有る鐵綱が命ハ本、鐵綱が切れたら身は忽ち谷底ハ蛇の食ひ物です。こゝに至るまでは勇氣も火と燃えて、こゝで忽ち水と冷めるが常とは誰れ心も同じもれか？いざや幅五寸の、苔よぬらつく自然の危橋と踏まうといふ處で誰がふるへずに居られましやう。　顚へと促がす寒氣は殘虐。七月は夏が猶冬です。　見なければいゝに其處が人情、つひ谷底とすかし見れば亂雲白雪千年のまゝに殘つて珍らしい人間の生物に腮を張つて待つてゐるやう。　風さへ烈しく足をとられる誰が立つて歩々ましやう。　馬琴が庚申山で現八が石橋をわたる處と叙し、やす〳〵それを渡ッて現八は全く柔術に長じてゐたよしとぞいふ、流石に思ひ當る事です。　こゝに至ッて道はせよ居られず、更に安全を索めて道と馬乗りに跨つて擦り行かずに居られず、こゝまで攀ぢてくる人すら少ない處、更にこゝで勇氣を挫かれて立歸る人が過半とか。　思へば役行者が此處をも經て　更に絶頂の最絶頂の劍ヶ峯に高足駄の齒を鳴らした恐しさ。　蟻はとわたりを渡つて氣のむくまゝ、險岨に打ち勝ち打ち勝つてうけ回れば越後の海もはや目に入つて、而も信州甲州二國をつらぬいて富士も珍らしく見えるとは！、近く見れば飯縄、黒姫、妙高の諸山、遠く眺むれば越中、飛彈の連山、木曾の山々、われを見ろと言はぬばかり。一劍直ちよ天宮を衝くの之鋒先山一脈急よ空と支へるのハ御嶽山わちこちよ間斷なく湧く亂雲の樣も種々さま〳〵。つかれて山の腰にもたれ掛るのもあり、怒ッて大獸の牙を張ッて走るのもあり、其間さても奇絶、塵よ染まず、白けた峯の岩角に肩を怒らせて止ッてゐた鷲が獲物を見てか、ゝの天地を我物がほ、縦横無盡よ飛ひまはる造化一個の大觀！　ひるがへつて山の岩を仔細に尋ねれば、白玉の山をなし、水晶窟、形ち怒ッた獸王に似た獅子窟、天帝窟、大多利窟、仙人窟、大岩殿、歡喜窟、金剛窟、三世窟、威德窟、猿女窟、不動窟、西窟、長岩殿、三層窟、虛空窟、象窟、五色窟、大隈窟、小隈窟、中窟、鷲窟、利軍窟、金窟、藥師窟、日中窟、大盤窟、智慧窟、醍醐窟、梯漸窟、そして醍醐窟と藥師窟との間よわるのが天岩屋、すべて岩がすなはち窟、外よハ佛掌窟なさ、言ふのも有ッて窟の數が大低三十ばかり、思へばよく斯う揃ッた物です。

わゝ山の奇といひ、海の妙といひ、自然ハ無心で作ッたものがよくもかうまで完全なもの。近づいてつら〳〵見れば岩の色ハ矢張り鼠、それながら夏の三伏四人の着る肌着の色とハ思はれぬ、さても天地秀靈の氣ハ凝ッたもの！　岩角よたゝずめば千里一瞬の風が耳を擦ッて天ハ何所まで連なる事りまた何所まで高いなと、素晴らしく大きな夕陽が天神の毯を拋ッて餘所に配かつ餘光ハ永久不變の天火の彩色り。咽喉わづか三寸、つんざける斗り叫んでも裝と玩ぶ風の囁きよ之勝てず、目を閉ぢておッと觀念、金輪を暗黒の皮裏よ湧かせても終に消えがゝる横雲の鍍金の色にさへ及むね——さても偉八とハ何のことか！　曾て大平洋よ向ッて立ッた時、成る程海ハこんな物かと坐ろに舌と卷いた、それと同し心持ち。しかし今比較して考へれば海の大と山の大とも亦進ッた所も有りました。　思ふに日本の山ハ富士、富士でもない所で是程に考へるのハやゝ量の狹い至りながら思ひ切ッて切り開けた天に向ッた心持ハ要するに推せる事でしやう。　で、比較すれば海の大ハ快活よ近く、山の大ハ威嚴ふ傾いたやう。例もれば海ハ希臘の神らしく、山ハ印度の佛めいたやう。濤怒ッて天を呑む所ハ壯なものゝ、一旦怒りゝ風と共よ消えれば面嬌羞とうつす銃を拭ッて平和優美、また愉快。之を山の千本の劍はけしく空と刺し、千秋の靈氣を凝らして人を睨め下す所よ比べて凄まじいのそ、そも〳〵どちら？

　さして深い考へが催さぬものゝ、立ち去るのハ殆んと強面いやう。夕暮よ促がされて割愛する事となりました。　山守ハ愛嬌のある男、若い時にハ江戸にも居たとか、たゞ吾々と

駭かしたのは前に記した飯繩系れ鳥居、その建立ハ殆んと十年前。で、立ッた以來まだ一度も其山守ハ見ぬとの事、即ち山に起臥して些しも下界を踏まぬ譯。質朴で金錢をむさぼらず、敝衣一枚の千年れ裘、床の間に吊したものを何かと言へば冬雪に山が埋つた時の用意に取つて置く獨活との事でしたもや足ハ引ずるやう、やがて打ち連れて中社へ立ち歸る道、いづれも骨ハ中々折れましたが、道で梢などから下る猿尾草など見れバ飛び附いたり、下つたり、いよ〳〵草臥に掛たをゑました。中社の久山氏方へハ轉げ込む、直ちに風呂にてろげ込む、透きとほる湯に心氣全く恢復して一同休浴を終つてやがて膳に向へば早燈光が點きました。夜ハ晝とかはつて料理、いづれも佳味でしたが、外に猶一つ珍らしいもれが有りました。即ち給仕に出る處女、年ハ十七八、口重で容易に物を言ハず、かざりも無く唐人髷を結んで飛白れ單衣と赤勝ちの帯、質朴な、世にすれぬ氣色正にたッぷり、他日清潔な部の少女を詩か小説に使ふ時にハ之に因つても宜さゝうだ。笑顔を出すれも惜しいと言ふ体、一寸蝕らしたと思ふ間にすら見直せも何處へやら。燃燒れ早い花火といふ風で、要することに其名ハさても〳〵、何かと言へバ「紅葉」と一言。要するに是ハ紅葉狩れ故事から緣で命けた名、御前が鬼女かと言ッてさへ泣き出さうのと危まれる様。

　　秋ハまだ知らぬ深山の若もみぢ
　　　　以かなる風の色に染むらむ。

夜の寒さも骨に透ッて、中宵目が覺めて廊下へ立ち出れバ寢衣一枚なか〳〵凌ぎ切れず、溪流の音は山風に通ひ分ッて

——それ筈思へバ身ハ五千尺も上の事。

朝景色のうるはしさハ言葉に盡くされぬ、久山氏が貸してくれた羽織を引掛けて、ふたゝび近處を散歩して富士などをさぐり眺めて立ち歸つて食事につき、それからハトランプ又花がるた、また第一に志した所藏の寶物などを見ました。寶物ハ久山氏の家に預る分が長持に三つばかり、故さらに許されて吾々の自由自在、見張りも何もせず勝手に引き出して自由に見せてくれた久山氏の深切ハ深く感謝します。寶ハ何處れ名所舊跡でも案内が錢を貪つて早口に由緒を説いて人に隔靴れ感をいだかせるれハ普通れ事、此日自由に品に近づいて寫す事の出來たのは何よりも仕合はせでした。寶物は多數で數へ切れぬもれ、、其中での尤物を拔けば即ち左の品々でした。

一　持統天皇御所用犀角御笏（形ハ後世の笏より小形切落しも少ない方）

二　後醍醐天皇宸翰

三　後陽成院懷紙（歌の題ハ重陽月詠菊有新花とあり、歌ハ「うへりへてなとゐくあきと契らまし、けふとはじめの白きくの花」但しこの假名ハ思ふ所あッて原文の儘にしました）

四　正親町天皇和歌（「みよしのゝ山の白雪つもるらし、ふる郷さむくなりまさるなり」例の有名れ御歌です）

五　後光嚴院歌切

六　定家卿式紙（たのミてし常盤の山も大空の霞にかすむ世にてそありけれ）

七　賴政和歌二首（是ハ取落して忘れました）

八　武田信玄願狀（上杉に對して勝軍を戸隱山に所ッる漢文の願狀、年付ハ永祿元年戌午八月）

九　西山公書翰

十　徳川秀忠和歌（題ハ逢不逢戀「千鳥なく澤邊のちはら風絶えて逢はでぞ歸る有明のつき」）

十一　慈眼大師一行物（長生殿前富春秋）

十二　烏丸光廣卿百人一首

十三　兆典司羅漢圖二幅

十四　探幽雪中文珠圖

十五　同人丸像（題歌はの〳〵ハ守澄親王）

十六　石川丈山贊堂々武侯圖（畫ハ狩野安重）

十七　戸隱山紅葉狩繪卷物二卷（畫工筆者共に不分明）

其他にハ佐久間象山の旗、家綱將軍にハとりの畫など一寸珍らしい物が許多、外に刀劒類に至ッてハ凄まじい物が無數でしる。

晝すこし過ぎてから名殘をしい山を下りはじめ、寶光社に立寄ッたそれからの歸り道ハいづれも前日と同様でした。山にハ種ヶ池、涌池などいふ池もある趣でしたが吾々ハ見ませんでした。何にしろ、今思ひ出しても其凜然とした姿ハ目にも逼るあゝ秀靈の名山！　（完）

（遞信省認可）

廣告

改良
養蠶術獨案内　全

紙數凡百ページ

●正價卅五錢●廉價廿五錢●郵稅四錢出版部數有限
但滿員セハ謝絶ス●送本ハ八月一日ヨリ着金順次●申込ノ際ハ必ズ送金（郵便小爲替ニテ濱松郵便局ヘ向ケ振込ムベシ）スベシ

右ハ汎ク內外專門學者及ビ經驗大家ノ諸說ヲ摘採シ加ルニ會主多年實試シタル諸法ヲ挿込シ蠶業ノ改良及ビ普及ヲ謀ルヲ目的トシ今回弊會ニ於テ編輯ス故ニ此書ヲ一讀スレバ蠶業上事ノ巨細ヲ問ハズ終始知レザルモノナキ世界無二ノ良書ナリ乞フ苟モ本業ヲ盛ニシ我邦ヲ利セント欲スル諸君誰彼ノ別ナク必ズ一本ヲ購求シ座右ノ友トナサンコトヲ

發行所　靜岡縣敷知郡白脇村　矯農會精蠶部

申込所　靜岡縣敷知郡白脇村瓜內　相佐脩

●懸賞歌文募集廣告●

本會此度賞を懸けて弘く世の優美にして才藻に富ミ給へる淑女達の歌文を募り●明治閨秀歌文●といふ書を出版せんとす其方法左の如し

一歌文とも題は隨意に撰まるべし　一歌文とも可成縱五寸橫三寸五分位の紙と用ひられたし筆蹟の特に麗はしきは其まゝ木板にして編中に挿むべし　一御寄贈の歌文は當時此道にて最も有名なる落合、高崎、下田、鈴木の諸大人に托し公明にして懇切ある撰擇を受くべし　一秀逸に登り給へる淑女の名譽を表せん爲め特に其ご肖像を請ひ得て卷首に揭ぐべし　一投稿期限は十月十日までとし本書は十一月中に出版し賞品と與に發送す　一本書に採錄すべき歌文の總數は凡て三百內外なるべし　一此募集に應じ歌文を寄せらるゝ時は本書出版費用として金五拾錢を添へらるべし

賞呈品

秀逸　中等製風琴壹個
甲　日本文學全書七册
乙　貴女之友自一号五十册
　　貴女之友自一号七十册
丙　明治閨秀歌文二册

東京市麴町區元平河町三番地
閨秀歌文會

●俳諧矯風雜誌

毎月二十日發行　第十五号既發

記事項目　○本會錄事○論說○俳况○解釋○質疑○詞林○寄書○廣告

●本誌定價壹册金十錢無遞送料拾部前金六拾六錢郵劵代用ハ一割增郵便小爲替ハ東京郵便局振込宛名ハ當會●本誌ハ注文ヲ受ルモ金子着セサレハ配達セス○前金ノ分モ金子盡レハ配達止ム●廣告料ハ五号活字廿五字詰壹行五錢拾行以上壹割減●會員ハ其三割ニテ廣告料ヲ申受クヘシ●本會々則ハ別ニアリ郵劵二錢ヲ送ラハ呈ス

東京日本橋區穀蠣町二丁目四番地
蕉風明倫教會內
俳諧矯風會事務所

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY